

歩兵第十六聯隊のシベリア出兵

新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

【第一部】

大正三年七月、第一次欧州大戦が勃発し瞬く間に世界大戦へと発展し、ドイツ・オーストリア・オスマン帝国・ブルガリアの同盟国とイギリス・フランス・ロシアを中心とした連合国の陣営に分かれた。日本・イタリア・アメリカも連合国側についた。

当時我が国は日英同盟によりイギリスと同盟の関係上ドイツ国に対し同年八月二十三日宣戦布告をした。武力により膠州湾・青島（ドイツ帝国東洋艦隊基地であった中華民国山東省租借地）を攻略しドイツ東洋艦隊を殲滅その後インド洋・太平洋方面の警備、さらには地中海方面まで出動し、連合国側に多大の助力をしつつロシアの行動を注視していた。

（第一次世界大戦）

大正六年十一月、ロシア革命が起こり、レーニン、トロツキー等の勢力に変わった。その赤衛軍は過激派となってシベリア全土にまで波及した。当時シベリアを通過して西部戦場に向かっていたチェコ軍団（元々露軍の捕虜であったが、連合軍の一員として対ドイツ戦線に向かった五万五千名の兵で実態はフランス外人部隊・第五ポーランド狙撃兵師団・ルーマニア義勇軍等を含む多国籍軍）と衝突

シベリアにおいて戦闘となったチェコ軍団は日・米・英・仏に対し武器・物資の供給と兵力の援助を要請した。連合国側はこれを援助しシベリア地方の交通・治安維持のため出兵することとなった。

大正七年八月二日、日本は出兵を決定し、第七師団（旭川）の一部をザバイカル州に、第十二師団（小倉）を沿海州及び黒竜州に配置した。其の後第七師団は第三師団（名古屋）と、第三師団は第五師団（広島）と第十二師団は第十四師団（宇都宮）と交代した。

連合国浦塩派遣軍の編成は、日本軍第十二師団・米軍二個聯隊・英軍一個大隊・仏軍一個大隊・のちに支那軍二個大隊・伊軍一個大隊が浦塩（ウラジオストク）に上陸した。

大正八年一月頃より、パルチザン（ゲリラ）による遊撃戦に苦戦。交通の要所を確保するのが精一杯であった。第十二師団は、パルチザンが潜む村落の掃討を行っていたが、そんな中、二月二十六日、田中少佐率いる「討伐隊」歩兵第七十二聯隊第三大隊が全滅するという事態となった。

大正八年十月、第十三師団（高田）が派遣されることとなり、第一次出発部隊は、隷下の歩兵第十五旅団（新発田）工兵第十三大隊（小千谷）であった。

大正八年九月十五日、第十五旅団（新発田）旅団長 小田切少将はシベリア派遣の臨時編成令を下達した。

九月十六日夕、十六聯隊長浅野大佐は、伊吹中佐以下、将校十七名、下士卒二百五十六名を先遣隊として出発させた。同隊は九月二十日浦塩に上陸、ニコリスク市に着き第三師団歩兵第六十八聯隊（岐阜）から守備区域の申送りをうけ、所要の準備及び配置についた。

九月二十二日、派遣隊編成完結し村松三十聯隊出発。

十月三日新発田十六聯隊本部・第三大隊・機関銃隊が敦賀港よりウラジオストクへ出発

十月五日、第二大隊出発。

第一大隊は当時、朝鮮暴徒鎮圧（独立万歳騒動）の為、朝鮮全羅南北両道に派遣されており帰還の途上であった。

十月六日夜半朝鮮より（第四中隊を除く）屯営に帰着、十月十四日、早くも準備を整え第一大隊は出発した。

聯隊は先遣隊より逐次出兵、十月十日、ニコリスクに到着、二十二日シベリアに於いて所命の配備を完了した。主としてエフゲニエフカ（スパスカヤ駅）・ニコリスク（現ウスリースク）間の鉄道保護に当たった。

第四中隊は天津駐屯軍と交代し同月十五日屯営に帰着、十一月一日出発、これで全ての部隊が派遣を完了した。

聯隊の守備交代後に於ける一般情勢は、各地至る所に不逞の徒横行し、強盗・虐殺等の報は、殆んど毎日のように伝えられ住民はその堵に安ぜず、まことに彼等は交通線に危害を加えるなど治安・交通の維持を本任務とする我が軍の使命に妨害を加えることが多かった。特にヤコブレフカ・イワノフカ方面では匪状最も活発で、その勢いあなどり難いものがあった。

「ヤコブレフカ方面の交戦」

大正八年十一月八日、スパスカヤとの通信が不通となり、ヤコブレフカ守備中隊から保線兵を派遣したが、シャンガーハ河南方谷地において、約七十名の匪徒から包囲され下士官以下六名死傷し、軍服、脚絆、靴等は勿論下着類まで剥ぎ取られ積雪二寸の中に裸で遺棄されていた。ヤコブレフカ中隊主力が出動してアンドレエフカ方向に撃退した。

同十二月二十一日夜半から二十二日朝までに同地方の電信線切断、富樫特務曹長以下四十五名（機関銃一）の兵を派遣した。午後一時三十分頃シャンガーハ南方千メートルの地点で、突然北方から、次いで三方から敵の攻撃を受け、交戦一時間三十分に及び救援隊が到着し、午後四時敵を撃退した。この戦闘で戦死三名、負傷五名を出した。

その夜慰霊祭を行っている最中に、砲を有する数百の敵が夜襲をして来たが勇戦奮闘しこの敵を撃退した。

「イワノフカ方面の交戦」

イワノフカ駐留の第三大隊は、七・八十名を下らない敵が、タラソフカ（イワノフカ東方数里）付近に行動し掠奪、電話線の切断等行った為、大正九年一月十六日、第十二中隊長率いる二個小隊と機関銃二挺及び木村小隊を同方面に派遣。タラソフカに到着したが敵影認めず。帰隊のため同地出発して間もなく敵の監視兵二、三名発見、これを排して前進すると百メートル前方に百数十名の敵と遭遇し交戦二時間でこれを撃退した。当時外気零下三十度、地形は小起伏地でパルチザンには好適の地であった。この戦闘で木村小隊長以下戦死傷十七名を出した。

大正七年以来友軍として過激派軍の掃討に従事中だった米軍は大正九年一月初旬鉄道沿線から撤退を開始した。その為、一月十日、聯隊は旅団命令によりスパスカヤに移り、第一大隊及び歩兵第三十聯隊第三大隊（二中隊欠）を指揮し、米軍担当の警備地区の警備に任ずることとなったが、当時ニコリスクの民心不安定のため暫く留まった。